Aria －大分音楽幻想－

中山欽吾 なかやまきんご
iichiko総合文化センター館長
公益財団法人大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
公益財団法人東京二期会理事長

日本のオペラを世界的にした人達

日本を代表するオペラ団体の創始者であるテノールの藤原義江とバリトンの中山悌一が二人とも大分県に関係があるという事は本シリーズの初回で述べた。

藤原と大分の関係はやや複雑だ。天性の美声に恵まれた義江は、実は下関に来日していたスコットランド人貿易商と日本人女性との間に明治31年に生まれている。後にその女性は子連れで大分県に来て、杵築市の藤原徳三郎から認知して貰うことによって義江は初めて日本国籍を得た。従って、彼は戸籍上大分県人という事になる。彼を中心にした歌劇団が結成されたのが昭和16年。これが藤原歌劇団であり、藤原は総監督兼主役を務めて中心的な存在として昭和39年まで第一線で活躍した。

一方の、中山悌一は医者だった父親政男の六男として大分で生まれ、東京音楽学校（現東京芸術大学）を卒業した。戦後、音楽に飢えていたファンに求められて、全国を回って歌っていたソプラノの三宅春恵、アルトの川崎静子、テノールの柴田睦陸（むつむ）と悌一はいずれも東京音楽学校卒だったことから、遠征の道すがら自分達の将来や、新しい活動のあり方を語り合い、昭和27年に二期会という声楽団体を作り上げた。二期会とは、自分達が教わった先生の時代、つまり戦前を第一期とし、戦後に活動を始めた自分達を第二期としたのだという。

最年長の柴田は、オペラに興味を持ち、それに賛同した歌手達は力を合わせてオペラを作り上げることに情熱を燃やしていってもよい。その頃中山はドイツに留学してドイツリートの研鑽を積挙にお茶の間の話題にまでした。立川清登（澄人）も大分市出身であり、オペラ歌手として一時代を画したが、惜しくも過労が祟って人気の絶頂で亡くなった。

昭和42年には日本人だけの二期会で、ワーグナーの大作オペラ『パルジファル』を初演した。

公演前に著名な評論家から「身の程知らず」といわれたが、結果は大成功で、前言を取り消したという逸話も残されている。

イタリア、フランスものが得意の藤原歌劇団と全方位でドイツ、ロシア、チェコなどのオペラも果敢に取り上げている東京二期会という二つの団体は今も我が国を代表する民間オペラ団であり、よきライバルである。

そんな中で、大分県内でオペラ振興に努めたご夫婦を忘れるわけにはいかない。まだ地方では珍しい昭和43年にスタートした「大分県民オペラ」を率いた大分大学教授（当時）の小長久子さんとそれを支え続けた夫君の故隆成氏だ。当初は西欧の名作オペラを度々県民芸術祭で上演したが、やがて地元の民話や歴史上の人物を題材にした「吉四六昇天」や「白蓮」など数々の創作オペラを世に出した。「白蓮」とは、NHK朝のドラマ「花子とアン」で詳しく紹介された蓮子こと柳原白蓮のことで、別府に銅御殿（あかがね）といわれた豪邸があったが、白蓮を娶った炭鉱王、伊藤伝右衛門が彼女のために手を入れたもので、残念ながら今は県外に移築されてしまった。

中山欽吾

大分県立美術館開館記念 大分オペラフェスティバル

第1弾『フィガロの結婚』／2015年1月9日（金）・10日（土）　第2弾『リゴレット』／2015年2月25日（水）　第3弾『オテロ』／2015年3月14日（土）
場所：iichikoグランシアター　お問合せ：（公財）大分県芸術文化スポーツ振興財団 097-533-4004